

## 断想 阪神・淡路大震災

北村 弘行

1 1986年に兵庫県公害研究所を退職し環境庁所管の(社)瀬戸内海環境保全協会に席を置くようになった。事務所の所在が転々とした。兵庫県民会館を振り出しに三宮にある交通センタービル。そこで阪神・淡路大震災に遭遇した。M7.3の地震規模でビルは崩壊した。JR神戸駅東にある川崎重工(株)本社ビルのクリスタルタワービルに移転した。事務所はその後、大丸神戸店南側の建隆ビルへ、落ち着いたと思ったが脇浜海岸通に建設されWHOがある通称IHDセンタービルへ移った。都合5ヶ所で過したことになる。小文はクリスタルタワーへ通勤していたころの思い出である。

2 その頃、週刊朝日に司馬遼太郎連載の「街道をゆく」に“三浦半島記”が掲載されていた。《一掬の水》として紹介があったのを私なりに要約した。

『昭和19(1944)年3月、神戸の川崎重工で竣工し、大鳳(たいほう)と名づけられた世界最強、最新、最大の空母があった。空母から飛びたつた小松兵曹長が海面をふと見ると魚雷が雷跡を曳いて母艦に近づいていた。かれはとっさに機を降下させ、魚雷に体当たりして死んだ。という。この自己犠牲はまだ体当たり特攻が組織されていない頃である。

火事を消すのに、両掌で結んだ水を掛けてもむなしいが、しかし敗色の濃いこの時期のひとつとはみなそのようにして命をすてた。

『小松兵曹長が見つけた魚雷は、米潜水艦アルバコーアが放ったものだった。大鳳は小松機の体当たりによって雷跡に気づき、面舵一杯で回避したが右舷前部に、魚雷一本が命中した。被害は軽微であったが、前部のガソリンタンクに破孔が生じた。魚雷を受けたのは午前8時10分で、大爆発をおこしたのは午後2時32分であった。乗員2150名の内500名をのぞき、ことごとく死んだ。不沈空母といわれたほどの防禦力があだになった。兵器というのは、常にそういう矛盾を持っている。

『川崎重工の造船設計部では、この薄命におわった艦を惜しむあまり、昭和28年ごろから精密模型をつくりはじめ、やがて社宝として残した・・・。

3 クリスタルタワービルの川崎重工（株）本社事務所エントランスには社の歴史をかたる船舶や車両の模型が陳列してあった。会社で当時環境部門を担当しておられた知人に週刊朝日の《一掬の水》を話し、大鳳の模型を拝見したいと頼んだ。艦船の模型は神戸工場で保管しているということで、紹介して下さった。

連絡をうけて訪問した。震災後のことで整理も進んでいないが、と聞いていた。ガラスのケースに入った無傷の模型。ケースは破損しているが本体は無傷なもの。商船、軍艦など大別され並んでいた。なかで、ただ一体の空母の模型が床に落ちていたという。それが大鳳だった。高角砲、艦載機の模型ははがれ落ち、もとの場所は不明のままにまとめてあった。

悲しい運命に終わったマリアナ海戦での最後を思い、いままた模型の痛ましい姿を眺めるにつけ胸がしめつけられた。

4 夏のある日、宇治野山を訪れた。青春時代をすごし、多くの先輩から未来への指針をいただけてきた、心のふるさと神戸海洋気象台も大震災に遭遇し、日々親しんだ嘗ての庁舎は取り壊されアメダス観測用の塔がたつ更地になっていた。

長年世話になった化学実験室、図書室、神戸港の風景をながめた海洋課も想いでのかなたに去っていた。空母「大鳳」が進水したとき先輩たちは露場、庁舎の窓から見つめたであろうみなれた川崎重工（株）神戸造船所の風景が変ることなく目に飛び込んだ。

炎に包まれた街。崩れ落ちた住宅。17日で震災から14年になる。記憶が風化していく懸念から、断想をメモに纏めてみた。

2009年1月15日

## 【阪神大震災と空母大鳳】

北村 弘行

1995（平成 7）年 M7.3 の阪神・淡路大震災で神戸三宮の交通センタービルにあった事務所が崩壊し、JR 神戸駅東にある川崎重工（株）本社ビル（クリスタルタワービル）に移転した。

小文はこのビルに通勤していたころの思い出である。

1941（昭和 16）年 7 月川崎重工（株）神戸造船所で起工、1943（昭和 18）年 4 月進水後 1944（昭和 19）年当時の呉軍港で竣工した航空母艦（大鳳・たいほう）がある。

司馬遼太郎が週刊朝日に「街道をゆく」で《一掬の水》として三浦半島記に掲載していた。大鳳の紹介があったところを以下、私なりに要約した。

『昭和 19（1944）年 3 月、神戸の川崎重工で竣工し、大鳳（たいほう）と名づけられた世界最強、最新、最大の空母があった。空母から飛びたつた小松兵曹長が海面をふと見ると魚雷が雷跡を曳いて母艦に近づいていた。かれはとっさに機を降下させ、魚雷に体当たりして死んだ、という。この自己犠牲はまだ体当たり特攻が組織されていない頃である。

火事を消すのに、両掌で結んだ水を掛けてもむなしいが、しかし敗色の濃いこの時期のひとつとはみなそのようにして命をすてた。

『小松兵曹長が見つけた魚雷は、米潜水艦アルバコーアが放ったものだった。大鳳は小松機の体当たりによって雷跡に気づき、面舵一杯で回避したが右舷前部に、魚雷一本が命中した。被害は軽微であったが、前部のガソリタンクに破孔が生じた。魚雷を受けたのは午前 8 時 10 分で、大爆発をおこしたのは午後 2 時 32 分であった。乗員 2150 名の内 500

名をのぞき、ことごとく死んだ。不沈空母といわれたほどの防禦力があだになった。兵器というのは、常にそういう矛盾を持っている。

大鳳は竣工まもなく呉軍港から出航マリアナ沖海戦に参加、6月19日16時28分に沈没といわれている。《一掬の水》は続く。

『川崎重工の造船設計部では、この薄命におわった艦を惜しむあまり、昭和28年ごろから精密模型をつくりはじめ、やがて社宝として残した・・・云々。』

川崎重工（株）本社に勤務しておられた方に週刊朝日の《一掬の水》を話し、大鳳の模型を拝見したいと頼んだ。艦船の模型は神戸工場で保管しているということで、紹介してくださった。連絡をうけて訪問した。震災直後のことで整理も進んでいないが、と聞いていた。ガラスのケースに入った無傷の模型、ケースは破損しているが本体は無傷なもの。商船、軍艦など大別され並んでいた。なかでただ一体の空母の模型が床に落ちていたという。それが大鳳だった。高角砲、艦載機の模型ははがれ落ち、もとの場所は不明のままにまとめてあった。

悲しい運命に終わったマリアナ沖での最後を思い、いままた模型の痛ましい姿をみるにつけ胸がしめつけられた。

中学で1年先輩の大庭 浩氏（伊丹中学37回）がこのとき同じビルで川崎重工（株）のトップでおられたとは。空母大鳳模型制作にまつわる秘話がきけたのに。いまとなっちはすれ違いが悔やまれてならない。

震災から14年が過ぎた。

（了）